ゆうことみゆきの。

なるほどアイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

アイヌ文化のことをもっともっと話したい！
本田優子と村木美幸の二人が、
その魅力を交代で執筆する
ソンコ（＝お便り）形式のエッセイです。

Vol.83

今月のテーマ

クスリ
―アイヌの伝統的薬学知識―

本田優子
（札幌大学教授）

一九八三年、二風谷の萱野茂（かやの）先生のお宅で居候をしていた頃、咳が止まらなくなったことがあったの。ある夜、みかねた萱野先生が「クスリ アフブカラ（薬をもらう）してくる」といって真っ暗な中を出ていかれた。いったいどこに？と不思議に思っているうち、手に何か蔓のようなものを持って戻ってこられたの。「これはレプニハッ（チョウセンゴミシ）。煎じて飲んだら治る」って。半信半疑だったけど、なんと本当に咳が止まっちゃった。森の神々からいただいてきた薬の威力。すごい、と感じ入ったものでした。

萱野先生のアイヌ語塾では、森が大切な教室でした。ある時、先生は木の皮を少し削って「うまいぞ、食ってみろ」と子どもたちに渡したのです。喜んでかじった途端一斉に悲鳴。「ひえ～！にが～っ！」萱野先生はその光景をみて笑いながら「これはニガキ。アイヌ語ではシウニ。日本語と同じで苦い木という意味。胃とか腹が痛い時の薬だからね」。そして私の方を向いて「本田ちゃん、人間、五感で覚えたことは一生忘れないものなんだ」って。今でも私の教育指針となっています。

イラスト／荘田悠人

アイヌ語でも薬はクスリ。アイヌの人たちの周囲にはたくさんのクスリがありました。腹痛にはキンミズヒキの根っこの白い玉、麻疹（はしか）の時にはフキの根を煎じた汁、腎臓が悪くておしっこが出ない時にはエゾニワトコetc…。近所のおじさんたちですら驚くほどの知識量。中でもひときわ薬草について詳しいと言われていたフチ（おばあさん）から、「話を聴きにおいで」と言われながら、赤ん坊連れでの訪問をためらっているうちに、フチは先祖の国へと旅立たれてしまったの。今でもこのことだけは残念でたまりません。

一方で、薬草のことをあまり口にしたがらないフチもいらっしゃった。「周りに生えている薬草に頼るのは、病院に行けないほどアイヌが貧乏だからだ。恥ずかしい」。アイヌの伝統的薬学知識はかけがえのない知的財産なのに、誇りを踏みにじられた社会状況の中、いったいどれほどの知識が悲しみとともに封印され、失われたことでしょう。本当に悔しい。 Ⓙ

次回のテーマは「アイヌの晴着あれこれ」村木美幸（アイヌ民族文化財団理事）が担当します。

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子（ほんだゆうこ）：金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸（むらきみゆき）：白老町生まれ。アイヌ民族文化財団理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■荘田悠人（しょうだゆうと）：平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。